

個性を認め合える世界に

光英 VERITAS 中学校 一年 利根川結衣香

私には自閉症の姉がいます。重度の知的障害もあるので、日常生活において全て介助が必要です。姉と話す時は短くわかりやすい言葉で話すようにしています。病気のため年のわりに背が低く顔が小さいです。急に高い声を出したり、周りとは少し違った行動をとったりすることがあります。幼かった私は姉のことを普通だと思い、障害のことはわかりませんでした。私が五歳のころから母が姉の障害について話をしてくれたり、簡単な絵本を読んでもくれたりしたので少しずつわかるようになりました。

ショッピングモールに行った時のことです。姉がいつも通りにしていただけたのに、すれちがう人達に変な目でジロジロ見られたり、冷やかされたりしました。姉はいつも通りにしていただけたのに、なぜ周りの人達は差別をするのだらうと私はとても悲しくなり泣いてしまいました。

そして、私の小学校は三年生の時にクラスがえがありました。低学年の時とはちがって、三年生になると周りの目や人の事が気になる時期だったと思います。学校行事に姉が来て、姉の見た目や変わった行動を見て、クラスメイトにおどろかれたり変な目で見られたりしたくないと思い、私は担任の先生に姉のことをみんなに伝えておきたいですと相談しました。先生は、道徳の時間に私に話す時間をつくってくれました。私は、姉が上手く話ができないことや大きな声や音、なれない場所が苦手なこと、みんなと少し違った動きをすることなどを文章にしました。そして、そんな姉を私は大好きだという事も書きました。一生懸命書いていきましたが、いざみんなの前に立つと泣いてしまい、話すことができなくなりました。今、考えるとこの時の私は姉のことをはずかしく思っていたので、みんなの前で話すことが出来なかったのだと思います。先生は代わりに読んでくれました。先生の呼びかけで、クラスメイトが姉に手紙を書いてくれました。みんなが姉のことをわかってくれてとてもうれしかったです。そして、姉が授業参観に来たときに、クラスメイトがうれしそうに話しかけてくれていました。姉も笑顔だったので、みんなに伝えて良かったと思いました。もし、道徳の時間がなかったら、私は不安な気持ちをいだいていたかもしれません。

なぜ人は見た目や行動だけで判断するのでしょうか。背の高さ、目の色、はだの色などいろいろな人がいます。また、走る速さや歩き方、話すことの上手・下手、物事のとらえ方は人それぞれです。

金子みすずさんの「私と小鳥と鈴と」の一節、「みんなちがってみんないい」は私が大切にしている言葉です。私は、姉の障害のことを気になりはじめたころにこの言葉と出会い、とても気持ちが楽になりました。みんなが思う普通ではないこと、人との違いは悪いことではないと思います。違いとは個性です。ひとりとして同じ人間はいません。違いがあるからこそ、お互いが想像できない意見や行動を受け入れることによって、成長できると思います。なぜそうなるのか、そう思うのかを考え、話してみることが大切です。抵抗のある人も多いと思いますが、違いを個性としてとらえ、尊重し認め合うことが差別をなくす第一歩になると思います。

差別がなく、すべての人が笑顔で生活できる世界になって欲しいです。